

ウィリアムズ症候群における「図と地」の多角的検討

Multidimensional Investigation of “Figure and Ground” in Williams Syndrome

根津 知佳子* 和田 直人* 安藤 朗子**
Chikako NEZU Naoto WADA Akiko ANDO
甲斐 聖子** 吉澤 一弥***
Seiko KAI Kazuya YOSHIZAWA

要約 吉澤・根津ら(2020)は、Williams Syndromeを対象とした投影法心理検査を用いた解析と解釈を通して、第7染色体異常に起因する小児科領域の難治疾患であるWilliams Syndromeやその家族の支援方法として、芸術療法(音楽療法)によるパフォーマンスが効果的であるという方向性を見出した。本稿では、まず音楽療法家のBoxill, E. H.に依拠したモデルに基づいた音楽活動を報告した。次に、美術教育・構成学、絵本学・アニメーション学および臨床心理学の領域から活動を提案した。精神医学の視座からは、Freud, S., Reich, W., Perls, F. S.,そしてBoxill, E. H.に至る精神療法の基本理念と技法の変遷を概観し、「図と地 (figure and ground)」の概念の拡張性について論じた。このように実践と理論の両面から検討・考察することで、Williams Syndromeにおける支援の本質を見極め、今後の活動に生かせればと考える。

キーワード：ウィリアムズ症候群, ゲシュタルト, 図と地, 家族支援

Abstract Williams syndrome is an intractable pediatric disorder caused by a chromosome 7 anomaly. Yoshizawa et al. (2020) analyzed cases of Williams syndrome using projective psychological tests and interpreted and analyzed those results. That study suggested that art therapy (music therapy) and family member support should be adequate treatment for patients with Williams syndrome. The current work begins by describing musical activities based on a model developed by the music therapist Boxill, E.H. Next, possible activities from the perspectives of art education, composition, picture book and animation studies, and clinical psychology are proposed. The basic principles of psychotherapy and various techniques devised by Freud, S., Reich, W., Pearls, F.S. and Boxill are reviewed to discuss the expansivity of the “figure and ground” concept. Examining and discussing both practice and theory should allow the nature of adequate support to be determined and utilized in future efforts to treat cases of Williams syndrome.

Key words : Williams syndrome, Gestalt, Figure and Ground, Family support

1. はじめに

Williams Syndrome (ウィリアムズ症候群：以下、ウィリアムズと表記する)は、第7染色体異常に起因する小児科領域の難治疾患である。吉澤・根津ら(2020)は、投影法心理検査を用いた解析と臨床心理学および構成学による解釈を通して、ウィリアムズの特徴と言われている社交性や表出言語に関する従前の言説とは異なる結果を見出した¹。そして、

* 人間生活学研究科人間発達学専攻
Graduate School of Human Life Science
Division of Human Development
** 家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Human Science and Design Division
of Child Studies
***日本女子大学名誉教授
Professor Emeritus of Japan Women's University

表出が抑制気味であり、緊張感や不安感、まれに敵意が見られ、対人面においては、不安と萎縮が見られることに対する支援方法として、心身のリラクゼーションや感情の表出を基盤とした芸術療法（音楽療法）によるパフォーマンスが効果的であるという方向性を見出した²。

音楽療法家の Boxill, E.H.は、感覚運動的経験によって“気づき=覚識 (awareness)”が活性化し、その発達が、図と地の知覚の発達とアイデンティティの確立につながるとしている。ボクシルにおける“気づき=覚識”とは、欲求やニーズや関心などに対応して、それらの充足や興味の対象となるものが地 (ground) と区別され、図 (figure) として前景に浮かび上がってくることである。

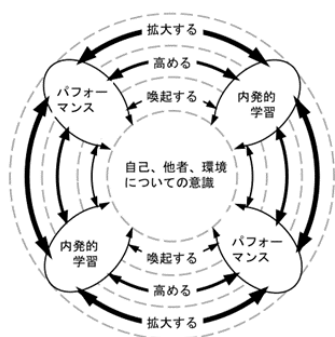


Fig. 1 『Continuum of awareness』³

根津ら (2020) は、ボクシルの“覚識の連続体”を改変し、ウィリアムズのための支援モデルを提示した。

本研究では、「図と地」に焦点を当てた、音楽療法 (2.根津)、美術教育・構成学 (3.和田)、絵本学・アニメーション学 (4.甲斐) の支援活動を概観し、臨床心理学 (5.安藤) および精神医学 (6.吉澤) の視座からその可能性と課題を考察することを目的とする。

2. 循環コードを地としたラップ活動創出

ウィリアムズの音楽的知覚の特徴として、音楽認知に関する狭義のゲシュタルト理論を逸脱するパフォーマンスを挙げることができる。根津 (2017) は、いわゆる「地となる伴奏」と「図となるメロディ」ではなく、「他者の困っていることへの着目」のような「いま・ここで起こっている関心事」が

「図」となることを明らかにした⁴。

ここでは、パッヘルベル作曲『カノン』をモチーフとする『遠い日の歌』を活用した活動モデルについて報告する。当該楽曲は、根津らが主宰する2001年度以降の音楽キャンプでは馴染みのある楽曲である。2007年には、図となるメロディー、2014年には、地となる循環コード (C-G-Am-Em-F-C-F-G) をいずれもトーンチャイムで演奏する活動を行ったが、Fig.1における「高める」「拡大する」ことは困難であった。これは、2小節単位のメロディや循環コードにおける音の役割の認識が困難であったという音楽的認知の問題と、その活動自体がウィリアムズの内発的学習を喚起し、高めるものに相当しなかったという最近接発達領域に関わる問題に起因している。

そこで、成人期を迎えたウィリアムズの「自己、他者、環境についての意識」を軸とする活動を検討するために、ウィリアムズと家族に対して「同質の音楽」の聞き取りを行い、感覚運動が中心となる活動 (ラップ、フラダンス、ガムラン) を創出した。この3種の活動の総体として考案した「循環コード全体を地とし、家族で考案したラップを図とする活動」の構造は以下の通りである⁵。

- ① 『遠い日の歌』のメロディを歌った後に、地となる循環コードを2セット分BGMとする。
 - ② ラップの歌詞の分量により、①を何セットか繰り返す。
 - ③ ラップを忘れてたり、言いよどんだりする場合は、次の循環コードの開始 (C) から入る。
- 5 家族によるパフォーマンスは、次の3種に分類することができた。

- A: 提示した枠組みに則った表現 (3組)
- B: 部分的に親子の応答が見られた表現 (1組)
- C: 親子で別のラップを交互に表現 (1組)

『遠い日の歌』の部分では、参加者が両手を横に揺らしながら歌うという運動が発生した。Bのパフォーマンスでは、何度も言いよどみながらも、循環コードの開始に合わせて挑戦しようとする行為が見られ、Cでは、パッヘルベルの時代の多声性を彷彿させるパフォーマンスが出現した。

以上から、創出した循環コードを地としたラップ活動には、ウィリアムズの「パフォーマンス」や「内発的学習」を循環させ、「自己、他者、環境に

ついで意識を「喚起し」「高め」「拡大する」ことが可能な“意識の連続体”の「枠」の機能が内在することを確認することができた。(根津)

3. 支援プログラムの省察と改良案

総合研究所研究課題 69「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究～主として投影法心理検査を用いた解析～」では、「風景構成法」を用いてウィリアムズの描画特性と視空間認知について調査を行った。ウィリアムズの描いた絵は、風景の全体像が把握できておらず、風景を構成している部分を部分的にしか認識していない顕著な描画特性が読み取れた。視空間認知の見たものの全体像を把握する機能には、「対象と背景を区別する働き」「形や色を認識する働き」「形と方向に左右されず、同じ形を同じと把握する働き」「物と物あるいは自分と物の位置関係を把握するための働き」の4つが挙げられる。このうち「物と物あるいは自分と物の位置関係を把握するための働き」についてウィリアムズが不得手としていることがわかった⁶。また、ローエンフェルド (Lowenfeld Viktor) の描画発達過程⁷に照らし合わせてみると、「様式化の段階」(平面空間の立体認識)に到達しておらず、「様式化前の段階」(閉じられた線の形から見立てる認識)に止まっていることがわかった。このことから、対象と背景を区別する働きである「図」と「地」を意識させることで、ウィリアムズが空間認知を抵抗なく受け入れられるのではないかと推察した。

2021年12月に開催された「音楽の森9」のウィリアムズ支援プログラムでは、「図」と「地」を意識した仕掛け絵本の「Die Cut」技法の利用を試み、絵本『エイトラさんのへんしんどうぶつえん』⁸を支援プログラムの参考とした。この絵本はページ中央に幾何学形態の切り抜き(マド)を作り、マドの空白から見える色やマドの周囲に描かれた図柄によってさまざまな動物の顔に変身する仕組みとなっている。支援プログラムでは、数枚の型抜きした紙へ自由に顔をイメージして描き込みをしてもらい、描画後、それぞれの紙を重ねて紙がめくられるたびに描かれた顔が変化する様子を楽しんでもらった。その結果、穴あきレイヤーを重ねるといった構造的な複雑さが、「図」と「地」を意識する妨げとなり、楽しんでもらうまでには至っていないように感じられた⁹。この反省を踏まえ、以下に支援プログラム

の改良案について言及してみたい。

ウィリアムズがレイヤー構造(重なり)を複雑に感じた要因は、ウィリアムズの奥行き認知特性が起因しているのではないかと考えた。絵画表現における3次元空間の重要な技法は、「相対的な大きさ」「重なり」「線遠近法」「空気遠近法」「きめの勾配」「陰影や濃淡」である¹⁰。このうち、穴あき紙を重ねるといった複雑な「重なり」のレイヤー構造が、ウィリアムズの認知に負担を強いていたのではないかと分析した。ゲシュタルト心理学では、人の意識の焦点に浮かび上がる対象を「図」とし、その背景にあって意識下に沈む領域が「地」となるが、穴あき紙を重ねたことで、意識領域(marked)と意識下領域(unmarked)が複雑化してしまい、ウィリアムズの空間認知に混乱を生じさせたと思われる。3次元認識における「重なり」は、手前か奥かといった「前後関係の空間把握」での有効な手がかりとされている。つまり、形態の輪郭が遮蔽されているか否かによって、それらの形態の前後関係が生まれ、明瞭な輪郭線を保った形態は手前に存在し、輪郭線が遮蔽された形態は奥にあると認識されるのが一般的な判断となる。「Die Cut」技法を用いたことで、重なり解釈への構造的な複雑さが加わってしまい、ウェルトハイマー(Max Wertheimer)のゲシュタルト要因(プレグナンツの法則)における「よい連続」としての輪郭線が曖昧となってしまった。このため、刺激配置の関係性に混乱が生じたと分析した。プレグナンツとは、「簡潔なこと」を意味するドイツ語であるが、「Die Cut」技法の構造的複雑さは、簡潔性や単純性から若干外れており、ウィリアムズの知覚体制化に対して障壁を作ってしまったといえる。

以上の反省を踏まえて、できるだけ複雑な構造を避けながら、簡潔・単純な構造による「重なり」を使用した「図」と「地」を意識した支援プログラムの改良案を考えてみた。今回は、ブルーノ・ムナリ(Bruno Munari)、ジョバンニ・ベルグラノー(Giovanni Belgrano)作、『+ e - PLUS AND MINUS』:邦題『つけたり・とったり』(コッライニ社、2008年)¹¹のイタリアの仕掛け絵本を参考にしてみた。この絵本は、付属の透明プラスチックシートに描かれた絵を自由に重ねたり組み合わせたりして、物語を作り上げるユニークな絵本として知られている。改良支援プログラムでは、透明プラ

スチックシートの代用として OHP シートを使用し、このシート数枚に描画してもらい、それらを重ねてお話を作ってもらおう支援プログラムを企画してみた。重ねるシートの順番によって、手前と奥の3次元的な前後関係を意識することができ、また、ずらして動かすことで動的な面白さが加わるため、ウィリアムズにも容易に「図」と「地」を意識しながら空間の全体像を楽しむことができるのではないかと考えた。シンプルな透明シートの「重なり」を用いることによって、「良い連続」の輪郭線なのか、あるいは「遮蔽」による輪郭線が途切れた形態であるのかが明確に判断でき、手前なのか奥なのか、前後の空間認識が判断しやすくなるのではないかと推察した。この改良した支援プログラムが、ウィリアムズ特有の空間認識に対しても有用であり、楽しんで取り組むことができるのかを改良支援プログラムを実際に行って確認したいと考えている。(和田)

4. 児童文化領域からの提案

本稿の中で、児童文化研究の領域からは、アニメーションを知識習得や、何らかの能力向上といった学修効果を狙った使用ではなく、仲間と豊かな鑑賞体験を共にすることや、正解がなく個々の自由に思案することなど、心の解放を目的とした活用の方策について提案する。

児童文化財の中でも絵本やアニメーションは、発達特性の有無を問わず幼い子どもたちにとって身近で、これらは情報伝達メディアとしての側面から、子どもたちに様々なことを教え、考えさせ、追体験させる中で、成長の手助けを担っている。

ウィリアムズは、情報の受容・統合・表現機能において、視知覚の「図と地の知覚」において困難さを持つと言われている。発達特性上の不得手なことに対し正解を探るあまりに、根津らの過去の研究結果からも自信喪失に陥り、表現面において消極的になる傾向も見られる。

2022年8月に行われた音楽キャンプにおいて児童文化研究の領域からは、入念に計画されたワークショップではなく、レクリエーションの一環として、アニメーション1作をウィリアムズの人たちとその家族、大学生、大学教員で共に鑑賞する時間を持った。鑑賞タイトルはコ・ホードマン (Co Hoedeman) 作「砂の城 (The sand castle)」/カナダ/1977/13分¹²である。活動の流れとしては、上記のアニメー

ションについての予備情報をほとんど参加者に伝えることなく鑑賞してもらい、鑑賞後に以下の事柄について考えてもらった。

【質問項目】①内容②感想③主人公の名前を想像④未来を予想(④のみ描画)

鑑賞翌日にそれぞれの回答をもとに共有活動を行った。このアニメーションは、一面に広がる砂地に砂で形作られた主人公(創造主)が誕生し、その主人公が砂の中から風変りな生き物たちを創造する。それらが力を併せて砂の城を作り遊んでいるが、やがて砂嵐が吹くとすべては砂に還るというストーリーである。簡潔に言えば、無⇒生⇒無の構造を持つ。

これを図と地の構造に当てはめると、視覚においては、砂地と青い空が「地」にあたり、主人公と生き物たち、そして城などの建造物が「図」となる。空を除く画面のほとんどが砂で構成されており、図と地が一部同化する場面や、複数の「図」が動く場面は、注視しないと「図」を捉えづらい。それを補うのが耳である。聴覚においては、背景音が「図」、作中にセリフがないため感情や情景を表す言わばオノマトペ的な役割を担う効果音が「地」となる。

鑑賞タイトル決定に至っては、ウィリアムズの視知覚におけるアニメーション受容の様相を探ることもひとつだが、それよりも、各々の経験の有無や知識などに関係なく鑑賞できることを理由とする。活動目的も第一に鑑賞体験を楽しむ、心を解放することを重視した。

ウィリアムズ4名の回答を以下に簡単に記載する。①②では、地と図の区別が難しい映像においても内容理解が十分にされていることがわかり、③の主人公の名前も実に創造的な回答が得られた。④は描画で回答を依頼したが、未来を予想するという点においては、雨が降って池ができる。砂嵐の影響のない地下や、別の場所に拠点を変える。などすべての回答において、再生や新しい世界といったキーワードで表現がされていた。無⇒生⇒無で終わるアニメーションに、新たな生をそれぞれが思い描いたようである。同時に鑑賞した4名の女子大学生の回答の共有も行ったが、児童学を専攻していることが関連してか砂地から砂場を連想し、いずれも再生の未来を描いていたが、遊具のバリエーションの増加や丈夫な城を築くことなど発想がいささか限定的であり、砂嵐によって無になったことに問題意識を持ち

それを解決するような未来を思い描いたウィリアムズの回答の方が豊かな発想が見られた。今回のレクリエーションの例のように経験や日常の関心ごとにより、発想が限定される結果は往々にしてある。継続的な研究の通過点で、根津らがウィリアムズだけでなくその場にいる参加者全員が、なるべくフラットな状況で取り組める活動を重視していることがわかり、意味を持たないアニメーションの鑑賞を思いついた。

幼児向けテレビ番組『シナぷしゅ』¹³の『どてっ』¹⁴は、あらゆる身近な「モノ」が倒れる映像に「どてっ」「ばたん」などの声をあて、視覚と聴覚のふたつの刺激を楽しめる視聴者からの人気も高いコーナーである。

『どてっ』の映像を、図と地の構造にあてはめると、視覚においては、鮮やかな黄色い背景に黄色いテーブル面という画面の大部分を占める範囲が「地」となり、中央に置かれたさまざまな「モノ」が「図」となる。聴覚においては、ラベル作曲『ボレロ』の背景音が「地」となり、「どてっ」や「ばたん」など声を使ったバリエーション豊かな擬音語（オノマトペ）が「図」となる。わずか1分の短いコーナーだが、毎回異なる10個の「モノ」がひとりで倒れ、それに併せて擬音語も変わる。背景音と黄色で占める背景である「地」は変わることが無いが、「モノ」や「声」である「図」は都度変化をしていく。

メインターゲットの赤ちゃんからすれば安定して変わることのない「地」と次々と変化をする「図」の映像構造に、安心と驚きの両立があり、心地よい鑑賞体験から快感を得ていると考える。ごく低年齢の子どもを対象とした総合番組では、集中力持続の観点からも、その番組構成は静と動の緩急があり、身体や頭を活発に使う教育的意図を持ったものから、心を緩めて解放する情操的な目的で作られたもののふたつに大きく分類される。『どてっ』は、後者にあたるが、幼い子どもたちと一緒に鑑賞する保育者にとっても気を緩めて鑑賞できる。出てきた「モノ」の名称を知っているか取るに足りないことで、出てくる「モノ」の質量や形状により、「モノ」がどう倒れ、どんな音がするかといった映像体験が見どころである。これは、経験や知識の有無を問わずに赤ちゃんと大人が同じ土俵にたち、楽しむことができる面白さに富む。このような意味の世界から外れ

たアニメーションの鑑賞により、ウィリアムズそしてその家族を含めた参加者が共有活動を通してアニメーションの持つ視覚・聴覚的な映像をどう受容するのか、継続的な関わりを通して検証していきたい。（甲斐）

5. 心理臨床の視点から

ウィリアムズの子どもや大人は、一般的に心配性で、他者からの批判や葛藤、又は他の人にとっては取るに足りないつまらない出来事にも容易に気が動転することが指摘されている¹⁵。また、吉澤ら（2020）の投影法心理検査による研究において、感情表出が抑制気味であり、緊張感や不安感、敵意がみられ、対人面においては、不安と委縮が見られたことが報告されている¹⁶。

このようなウィリアムズが抱える「不安」への対応として、多くの家族療法家に広く活用されている「リフレーミング」の技法が援用できるのではないかと考える。リフレーミングとは、ある枠組みでとらえていることを別の枠組みからとらえて新しい意味を付与することである。たとえば、ある親は、子どもが初めてのことにすぐに取り組めない臆病な子どもだと不満をもっているが、その子どもは、物事を慎重に熟慮してから取りかかるタイプの子どものかもしれない。このようにリフレーミングすることによって、人の短所は、長所にもなり得るのである。家族療法におけるリフレーミングは、肯定的意味付けの有効性が強調されており、重要視されている¹⁷。

ウィリアムズが、自分の抱える不安はどのようなものであるかを理解し、それを肯定的な意味付けにリフレーミングすることができると、不安が軽減されたり、不安でなくなったりする可能性があると考えられる。そのようなリフレーミングは、パールズの指摘する「図と地」の反転とも考えることができるのではないだろうか。

次に、リフレーミング技法の援用の仕方について考えてみたい。

（1）不安の原因に気づくこと

ウィリアムズに多くみられる主な不安は、①過度な要求、②変更と不確かさ、③脅しに起因するとされる。①は、良好な言語能力のために全般の能力が過大評価され、難題に対処できない状況が生む不安。

②は、新しいことやいつもと違うことに対する心配や不安。③は、対人関係の複雑さを理解することが難しいため、いじめや脅しと感じる傾向である。支援者は不安の予測が可能な事柄については、事前に話し合う時間を作ることで、こういった過度の不安を回避させることができる。

(2) 肯定的な意味付けでリフレーミングする

不安の原因は、必ずしも否定的な側面だけではなく、他者への気遣いから起こる場合などは、ウィリアムズたちの優しさなどの肯定的な側面が関与していると考えられる。支援者は、その点に目を向け、指摘することで、不安を軽減し、自分の長所と短所、その両方の自己知覚を促す機会となる。

(3) 不安の理解に効果的な言語の使用

ウィリアムズは、話し言葉は比較的良好であるが、理解力に劣るといわれる。ウィリアムズが理解しやすい言葉の使用を心がけることも大切である。

工夫の1つとして、視覚よりも聴覚優位のウィリアムズには、聴覚的な述語（動詞、形容詞、副詞）の使用を心がけることが考えられる。たとえば、「耳に痛い」、「まるで音楽のように響く」などの表現である。これは、人が情報を処理する際には、視覚、聴覚、運動感覚などの感覚器官の内、主として1つまたは2つを好んで使用する傾向があり、この点に留意することがラポール形成に有益であるという考え方を参照したものである¹⁸。この工夫が実際に有益であるかどうかの検証は、今後の課題とした。 (安藤)

6. 図と地の概念の拡張性に関する理論的検討

(1) 覚識、身体性、現在性

ここでは、フロイトからライヒ、パールズ、ボクシルに至る治療論の変遷を概観し精神療法における覚識と「図と地」の概念の拡張性 (expansivity) について明らかにしたい。パールズとボクシルは、欲求や欠乏の身体感覚的な覚識を基にして「図と地」概念を治療技法化した。同時に現在性や即興を技法上重視した。こうした覚識、身体性、現在性重視からなる洗練された技法は、フロイトとライヒの先達によって土台が築かれたと考えられるからである。

今回理論的検討を行う背景には、吉澤・根津ら (2020) がこれまでの活動を振り返るために鍵概

念として「図と地」を抽出し¹⁹、それを基盤として活動にかかわる専門家や実践者がウィリアムズの新たな支援ツールとプログラムの創出を活発に行っている事情がある。今回、各分野から示された到達点 (創出したツールまたは萌芽的アイデア) と理論的な検討により、異分野理解と交流がより進めばと考える。

なお awareness は、気づきと訳されることが多いが、ボクシルの著書「発達障害児のための音楽療法」を翻訳した林・稲田は以下の理由から覚識という訳語を与えた。本稿ではそれにならって覚識を用いる。

個人の欲求やニーズや関心などに対応して、それらの充足や興味の対象となる環境の事物、出来事などが、他のものと区別され、図として前景に浮かび上がってくることであり、この地と図の明瞭な区別ができることを意味している。それは焦点づけられ明瞭な意識のことであり、「目覚めた意識」を意味している、したがって本書においては「覚識」と訳すことにした (林・稲田 2003 序文 p.15 から引用)²⁰。

ジグムント・フロイト (Sigmund Freud)

フロイトが創始した精神分析学は、現代の精神療法のさまざまな流派に影響を与えている。フロイトの治療技法は、自由連想法により抑圧された無意識的欲求を患者に自覚させ、解釈的介入を行うことで洞察に導くというものである²¹。フロイトは覚識という言葉こそ使っていないが、それは技法論の中に前概念として埋め込まれていると筆者は考える。また、精神分析では無意識的葛藤を構成する欲求や欠乏を満たすことが目標ではなく、あくまで洞察することを目指す。したがって知的な自己理解が「図」となると考えられる。

フロイトは、患者が過去の重要人物に向けた感情を分析家に反復・再現する現象に注目し、転移 (transference) と呼んだ。精神分析は過去を扱うと批判されることがあるが、この転移概念は、想起された過去を現在の治療関係の中で扱うことを可能にする理論的発見といえる。つまり転移概念には、そもそも現在性重視の考え方が内在し、現在から未来志向の技法的発展の方向性を示唆していると筆者は考える。

身体性は小児性欲を中心としたリビドー理論に凝縮されている²²。フロイトがヒステリー患者に見出

した無意識は、性的葛藤つまり小児性欲に基づく近親相姦の願望の存在であった。フロイトは、小児性欲の口唇期、肛門期、性器期のそれぞれに性感帯が存在し多形倒錯的性質をもつこと、潜伏期（latency period）を経て、思春期以降に統合・完成された性欲に至ると考えた。各段階における身体感覚（性的快感）は、身体と対象（乳幼児期の母親を出発点として次第に拡大・多様化）を媒介すると同時に、この媒介プロセスからフィードバックを受け変容し、小児性欲優位から性器中心の身体感覚と対象選択へと移行するとした。

ウィルヘルム・ライヒ（Wilhelm Reich）

ライヒは若くしてウィーン技法セミナーの主宰者フロイトから任されるなど、指導的な役割を担った。ライヒは主著「性格分析」において、性格を類型化するとともに当時の精神分析界の課題であった潜在性の陰性転移の扱いに関して解決策を提示した。また、身体性についてもフロイトのリビドー理論を押しすすめ、性器期のリビドー欲求が制止された状況を病因として重視して神経症患者の類型化を試みた²³。

ライヒは、患者の連想態度や振る舞いが治療の進展を妨害する抵抗として働くため、まずそれを分析の対象にすべきであると主張した。具体例として、女性的受身的性格（passive feminine character）の患者の性格抵抗を挙げた。患者は分析家に対して、誇張された親しさと礼儀正しさや服従的な振舞いを示し、連想は過度に内容豊富であるが感情が伴わず、結果的に治療効果が乏しかった。ライヒは、分析家を喜ばせようとするこの迎合的態度の背後に治療者を欺こうとする不信の感情の存在を見出した。つまり父親への女性的受身的態度が治療者に転移され治療の進展に抵抗するという理解である。

想起内容よりも先に性格抵抗を取りあげるという優先順位の変更は、フロイトの転移概念に内在する現在性を具現化し、現代の精神分析技法の方向性を示したことから拡張的である。性格には個人史と神経症の構造が刻まれていることから、分析家が性格抵抗を取り上げるとは患者の感情を揺さぶり、知性化ではなく「いまここ」における感情を伴った想起に変容させる。

このようにライヒは、フロイトの有力な後継者として理論や技法を洗練させ、小児性欲よりも性器性欲重視の立場を次第に鮮明にし、抑圧はあくまで社

会的抑圧であるという独自性を打ち出した。そして性器期リビドーの欲求不満が性格の鎧（character armor）をつくるとした。以後、ライヒは精神分析学からは完全に離れて、身体療法であるベジトセラピーに向かった。

フレデリック・サロモン・パールズ（Frederick Salomon Perls）

パールズは当初多くの分析家と交流し精神分析医の資格を得た。とくに教育分析を3年間受けたライヒからは、身体性やいまここ（here and now）の現在性の認識に関して大きな影響を受けたと考えられる。その後ゴールドシュタインの元で仕事をしたことで、ゲシュタルト心理学（Gestalt psychology）に触れる機会を得た。パールズは次第に精神分析学を批判して距離をとり、ゲシュタルト療法を創始した²⁴。

全体は部分の総和以上のものであるというゲシュタルトの考え方からパールズはホーリズム（holism）をゲシュタルト療法の基本に置いた。患者が自らの欲求に接し（contact）、気づいて（awareness）、形に表現したり演じたりすることで、未完の経験（unfinished business）は閉合（closure）される。技法としては、目の前で表現されている患者の行動を解釈せず指摘することで覚識を促す。気づくことでその欲求は図から地に追いやられ、解放されたエネルギーは新たな図を見出すことが可能となる。この「図と地」の反転がうまくいくようになると、神経症の原因である「図と地」の曖昧さが解決されるとした。パールズはこのプロセス全体を「覚識の連続体」と呼んだ²⁵。

パールズはゲシュタルト心理学とのかかわりの中で、「図と地」の概念の適用範囲を、視覚的な知覚と認知から有機体のすべての機能に押し広げるのを主導した。また覚識の領域として内層（身体の気づき）、外層（環境の気づき）、中間層（思考や想像）の三領域を想定した。パールズのこうした「図と地」概念の拡張は、ゲシュタルト療法のみならず、他の精神療法や支援法においても汎用できる余地を与えたと筆者は考える。

パールズは精神分析以外にも、モレノの演劇療法、サルトルの実存主義、東洋の禅などを取り入れることで、ゲシュタルト療法をユニークなものにした。これらは、パールズがエサレン研究所で行った一連のライブパフォーマンスや演劇スタイル、患者の現

在の生活の質に関心をもつ視点、新しいものを新しいものとして体験する能力、即興性、そして先入観なしに世界を知るスタイルなどに見ることができる。エディス・ヒルマン・ボクシル (Edith Hillman Boxill)

言語的な交流が困難な重度の発達障害者の治療のためにボクシルが開発した治療法は、音楽をツールとして、パルズの「覚識の連続体」の概念を応用するという画期的なものである。それは、自己・他者・環境についての覚識を喚起し (awaken)、高め (heighten)、拡大する (expand) 創造的過程である²⁾。言語的な治療的交流が難しい患者を対象に実践して一定の成果を得たことは、精神療法の対象と非言語的ツールの意義を拡張したといえる。

ボクシルは、クライアント [ボクシルは患者ではなくクライアントと表記] がセッションに積極的参与を促す技法の前提として、治療者とクライアント間の信頼関係の構築を強調する。動機づけを促し、自律性を育むことが発達障害者のニーズに沿うと考えた。

ボクシルはパルズの他、マズロー、ロジャースなどの人間性心理学やエリクソンなどにも造詣が深く、音楽を覚識のツールとして使う根拠に、ジンカーの欲求の充足の理論を援用するなど幅広い観点から理論構築を行った。

ジンカーは、欲求の充足を「覚識-興奮-接触のサイクル」(awareness-excitement-contact cycle)として定式化した²⁶⁾。これは生物全般に共通する自己調節のサイクルであり、感覚 (sensation) から始まる。感覚に気づいた時点で自分の身体的欲求を理解できるようになる。次に身体機能が活性化し興奮の段階に達する。欲求充足に気づくアクションステージとしての接触でサイクルは完成し、その欲求は図から地へ、別の欲求が地から図へと反転する。健康な状態では、サイクルは途切れることなくスムーズに流れる。

ボクシルは、重度の発達障害患者の覚識を目覚めさせ、高め、拡大するための3段階の方策を考案した。①反射 (reflection) とは、クライアントを音楽的・非音楽的にミラーリング (mirroring) したりマッチング (matching) したりすること、②確認 (identification) とは、治療者を音楽的な形 (歌と楽器の両方) で象徴的に表現すること、そして反射と確認を経て③コンタクト・ソング (contact song)

を見出すことで、コミュニケーションが保持され確かな関係性の確認が可能になると考えた。

ボクシルは自己感に届くような情動的インパクトを重視した。また音楽的な創造的行為の出現は、クライアントが新しいやり方で手を動かしたり、新しい音を出したり、トーン・バーを初めて鳴らすといった行動の変化でわかるとした。ボクシルは治療者に求める姿勢について、クライアントの行動、反応などあらゆる状況に対して開かれていること、実存的に参加することであると示唆している。

(2) 「図と地」概念と支援ツール創出の到達点

根津が手掛けてきた音楽療法分野におけるツールの創出過程は、音楽キャンプを中心とする活動の歴史と文化を象徴している。長年の創造的努力と改変により、音楽的ゲシュタルトの「地」としてのパッフェルベルのカノンコードを見出した。17世紀の教会音楽にルーツをもつカノンコードは、時代的淘汰を生き残り現代でも幅広く採用されている点で普遍性 (collectiveness) を有し、ボクシルがいう情動的インパクトをもたらすといえよう。根津はこれに「図」となり得るラップを組み合わせて、覚識の連続体の活性化を促進するパフォーマンスとして洗練させた。

和田は「Die Cut」技法の実施経験の省察から、「重なり」の解釈への構造的な複雑さを排除し、プレグナンツの法則における「よい連続」としての輪郭線を際立たせる新たなモデルを考案した。イタリアの仕掛け絵本を参考にしたもので、描画するシートを重ねる順番により、手前 (図) と奥 (地) の3次元的な前後関係を意識させるものである。また活動を楽しめる工夫として、動的な面白さを導入した。焦点化と動機づけへの配慮は、支援ツール創出における心構えとして重要な到達点を示している。

甲斐は児童文化研究の領域からアニメーションを取りあげた。知識習得や能力向上といった学修効果を狙った使用ではなく、年齢を問わず仲間と豊かな鑑賞体験を共にすることや、自由な思案など心の解放を主眼とした。紹介された2つのアニメーションにはオノマトペが、「図」と「地」の明確化のために効果的に使用されている。聴覚刺激の中でもとくにオノマトペの汎用性に着目したといえる。また使用されるアニメーションは、例えばウィリアムズが問題意識を持ち解決のための未来を描けるといった

豊かな発想を引き出す観点から選択されている。

安藤は臨床心理学の立場から、家族療法で用いられているリフレーミングに着目した。リフレーミングは、クライアントが意識している「図」の否定的な意味づけとは異なる肯定的な意味づけを提示し気づかせるいわば積極技法である。援用する際に行うウィリアムズとの話し合いは、個別の不安内容を明確化するためのアセスメントの意義を強調したものである。不安の理解に効果的な言語を使用する工夫は、「図」であるメッセージの輪郭を際立たせる方法と考えられ、今後の実践が期待される。(吉澤)

引用文献

- 1 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人：ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究—主として投影法心理検査を用いた解析—、『日本女子大学総合研究所紀要』23号, pp.143-168 (2020)
- 2 根津知佳子・吉澤一弥・和田直人・角藤比呂志：ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス, 『日本芸術療法学会誌』, 第51(2) pp.44-53 (2021)
- 3 根津ら (2021) : Boxill, (1985, p.234) および, 林・稲田, (2003, p.276) を基に筆者らが改訂したWSの“覚識の連続体”の図(56ページ)を転載
- 4 根津知佳子：情動調律に着目したパフォーマンス評価の意義『日本女子大学紀要 家心理学部』, 第65号, pp.11-18 (2018)
- 5 2022年10月2日(日)開催の「音楽の森10」で実施した。当日は、日本女子大学新泉山館大会議室とスタジオ CAVERI を配信基地とし、5組の家族が参加した。
- 6 吉澤・根津・和田 (2021) 前掲論文
- 7 V・ローエンフェルド(竹内清・堀内敏・武井勝雄訳)『美術による人間形成』黎明書房 (1969)
- 8 ロイス・エイトラ(なかがわもとこ訳)『エイトラさんのへんしんどうぶつえん』偕成社 (1997)
- 9 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人・安藤朗子：ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～『日本女子大学総合研究所紀要』第25号, pp.92-118 (2022)
- 10 仲谷洋平・藤本浩一編著『美と造形の心理学』北大路書房 (1993)
- 11 Bruno Munari, Giovanni Belgrano (Edizioni Corraini, 2008) 『+ e - PLUS AND MINUS』
- 12 『砂の城』(The sand castle) <https://www.youtube.com/watch?v=hvzqmoPu2H4> NFB公式YouTubeチャンネルより(最終アクセス2022年10月23日)
- 13 『シナぷしゅ』2019年12月のパイロット版放送を経て2020年4月6日から現在も放映中。テレビ東京系列で放送の幼児向け番組
- 14 『どてっ』<https://www.youtube.com/watch?v=RGrkmj5Cznk> シナぷしゅ公式YouTubeチャンネルより(最終アクセス2022年10月23日)
- 15 Orlee Udwin, Patricia Howlin, Mark Davies : Adults With Williams Syndrome Guidelines For Families & Professionals. The Williams Syndrome Foundation. 富和清隆, 岡田眞子訳『成人期のウィリアムズ症候群—家族と専門家のためのガイドライン』ウィリアムズ症候群の会 (2000)
- 16 吉澤・根津・和田 (2020) 前掲論文
- 17 Baker, P. : BASIC FAMILY THERAPY. Blackwell Scientific Publications. (1981) / 中村伸一・信国恵子監訳, 家族療法の基礎, 金剛出版, (1993)
- 18 Baker, P. (中村・信国監訳) (1993) 前掲書
- 19 吉澤・根津・和田 (2020) 前掲論文
- 20 ボクシル, E, H. (著), 林庸二, 稲田雅美 (訳) : [実践]『発達障害児のための音楽療法』, 人間と歴史社, (2003)
- 21 フロイト, S. (著), 小此木啓吾 (訳) : 『想起, 反復, 徹底操作』, フロイト著作集 6, 人文書院, pp.49-58 (1970)
- 22 フロイト, S. (著), 懸田克躬 (訳) : 『性欲論三篇』フロイト著作集 5, 人文書院, pp.7-93 (1969)
- 23 ライヒ, W, H. (著), 小此木啓吾 (訳) : 『性格分析—その技法と理論(現代精神分析双書1)』, 岩崎学術出版社, (1966)
- 24 Perls, F. S. : Gestalt Therapy Verbatim, Gestalt Journal Press ; Revised edition, Goldsboro, (1992)
- 25 Perls, F. S : Four Lectures in Gestalt Therapy Now Theory, Techniques, Applications, (Fagan, J.), Harpercollins College Div, New York, (1971)
- 26 Zinker, J.: Creative Process in Gestalt Therapy (English Edition), Vintage books, New York (1978)

